

ザルツブルク・ モーツァルト週間

(期間:1月23日~2月2日)

テノール歌手のローランド・ビリヤソンを新総裁に迎えた昨年、「モーツァルトは人をつなぐ」をテーマに掲げて大成功したザルツブルク・モーツァルト週間。2年目の今年は、主役を管楽器、テーマは「モーツァルトは生きている」とし、1月23日から10日間にわたって50公演もの催しものが並んだ。

取材・文=中 東生
Text=Shinobu Naka

開幕コンサート

昨年同様、初日の午前にはモーツァルトウム財団ウィーンホールで来年のライナップを発表、そのもようはFacebookでも流された。午後は祝祭大劇場でのオープニング・コンサートで、今年の指揮

【ビリヤソン総裁2年目、 今年のテーマは「モーツァルトは生きている」】

者は、女性版モーツァルトのような出で立ちのクリステイナ・ボスカだ。女性らしい細やかさで端正な音楽を作り出すのだが、より先に先導していく力がまだ付いていない印象を受けた。ザルツブルク・モーツァルトウム管弦楽団は交響曲では受け身だったが、《レジーナ・チェリ》(天の女王、キリスト教の聖歌)を歌ったクレール・エ



《メサイア》から、ソプラノを歌うエレナ・ツアラゴワ ©Lucie Jansch

リザベス・クレイグ、「ホルン協奏曲」のベン・ゴールドシャイダー、「クラリネット協奏曲」のアンネリエン・ヴァン・ヴァウヴェ、「フルートと管弦楽のためのアンダンテ」のリザ・フレンドと、若手ソリストたちが登場すると調子を上げていった。最後は元団員だったというリツカルド・テルツォによる「ファゴット協奏曲」で華やかに締めくくったが、開幕コンサートとしては小粒だった。(1月23日、祝祭大劇場)

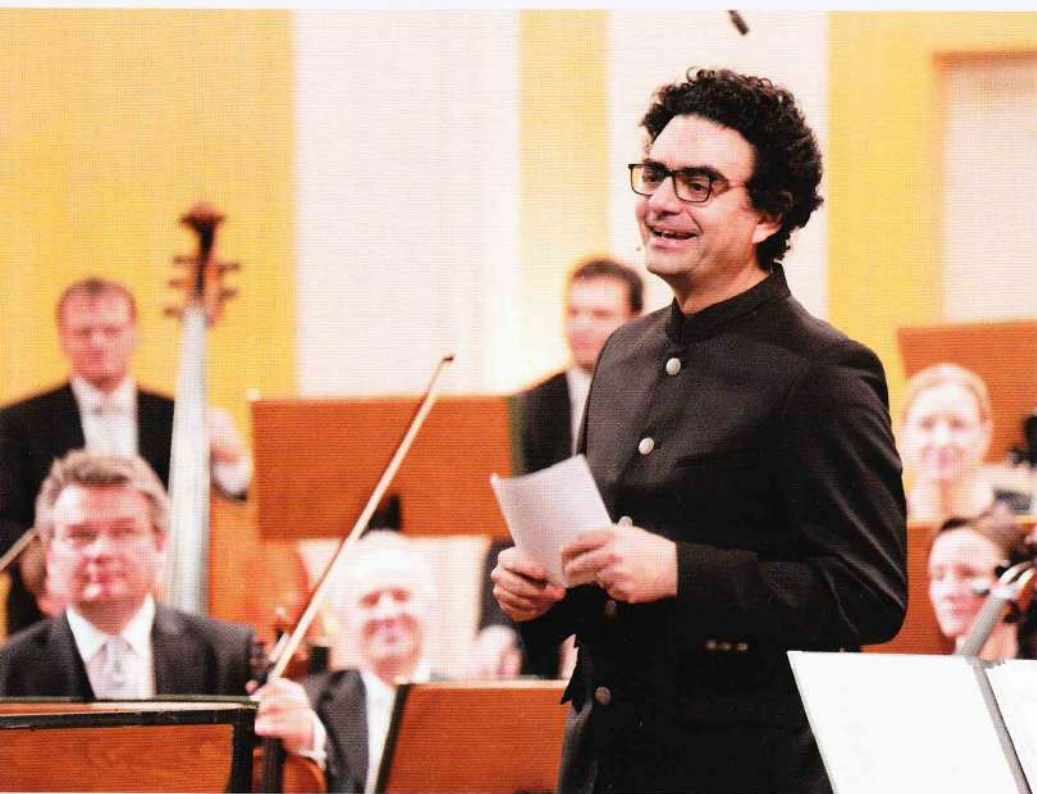
モーツァルト編曲《メサイア》

夜はモーツァルト劇場で今年が目玉公演《メサイア》が初日を迎えた。ヘンデルのオラトリオをモーツァルトがドイツ語で編曲したもので、総合芸術家のロバート・ウイルソンが演出を試みた企画だ。「宗教は教会で語るもので、劇場に宗教の居場所はない」という彼は、メサイアをイエス・キリストの物語から、普遍的自然を崇める音楽とした。もちろん歌手たちは「ウイルソン・メイク」(白塗りや強調した眉など)を施され、ウイルソン演出の「手つき」(手の甲を反らして、体の横でポーズを取る)で、「ウイルソン・ブルー」のなかでゆっくり動くのだが、背景の海に浮かぶ陽光が天使の後光のようになったり、一つひとつのシーンを印象的に視覚化したりした。そこにマルク・ミンコフスキ率いるグルノーブル・ルーヴル宮音楽隊の演奏が沁み入る。天使のようなソプラノのエレナ・ツアラゴワは美声が引き立ち、ワルキューレのような女性像を担うアルトのヴィーベケ・レームクルの穏やかな語りのような歌唱は心に響き、世俗的存在のテノール、リチャード・クロフトは、有名なアリア《リジヨイス》

もソプラノが歌うとき以上に、軽く楽しそうな完璧なアジリタ（細かくて速いパッセージ）を聴かせた。それと対をなす、神秘的な存在のバス、ホセ・コカ・ロサだけが、アリアでパワードウンした。ウイーン・フィルハーモニア合唱団もソロと同格のすばらしさだった。

へのオフアーをもらった驚きなどを語るウイールソンの姿が印象深かった。（1月23日、モーツァルト劇場）

翌日はフェルゼンライトシユールで初日を迎えた《フィガロの結婚》を観た。ピリヤソンが構成したセミ・ステージや、カペラ・アンドレア・バルカ（C A B）のオペ



オープニング・コンサートでナレーションを務めるピリヤソン ©Wolfgang Lieberich

— Mozartwoche (Mozart Week 2020) —

ラへのアプローチ、とくに魅力的な女声歌手陣など、興味を魅かれる企画で、数カ月も前から売り切れになっていた。

アンドラーシユ・シフの振る「序曲」はゆっくりめのテンポでアクセントを多用するが《フィガロ》に必須のワクワクする躍動感がない。しかしシフがハンマーフリユーゲルを弾き出すと、その美しさにしばらくはなにも言えなかった。ただ、入るのが1秒遅くても、レチタティーヴォのテンポを引張り、物語の進行を妨げるので、このオペラを隅々まで熟知していないとむずかしいだろう。第2幕のフィナーレなど、テンポが曲想にびったりハマると、目が覚めたように美しいオーケストラが鳴る。

歌手陣の筆頭はスザンナ役のレグラ・ミューレマンだ。自然体な演技と、簡単に歌



《フィガロの結婚》のカーテン・コールから。左からボラック、ムラーロ、カーグ、ミューレマン、ファン・メラーツ、シフ、ベッシュ、レージネヴァ、マクロリン、ブラウアー ©Wolfgang Lieberich

いこなすテクニクが公演全体を支えた。次にアンジェラ・ブラウアーのケルビーノも、女性的な体つきを忘れさせるほど少年らしい歌い回しだった。伯爵夫人のクリステイアーネ・カーグは登場のアリアでわずかに音程が下がったり、あたたかみがなかったりと、8年ほど前に聴いたスザンナを歌ったところが懐かしまれたが、合格点ではある。ユリア・レージネヴァは立派に成長した声バルバリーナにはハマりきらなかった。マウリツィオ・ムラーロはドン・バルトロとアントーニオを掛け持ちしたが、立派な声と音楽性でイタリヤ・オペラを体現していた。健闘した男声陣だが、ジュリアン・ヴァン・メラーツがフィガロのアリアでミスしたときや、積極的に演じていた伯爵のフロリアン・ベッシュが婚礼シーンでの独白で入りそびれたときも、歌手をフォローできない指揮者というのはいかがなものか。カペラ・アンドレア・バルカの演奏が完成しすぎていて、歌手にとっては入りにくく、演奏会形式でプロンプターもないし、モニターの指揮を見ることもできない。その困難な状況のなかに歌手を置き去りにしないようにするのが、来年の《ドン・ジョヴァンニ》での課題だろう。（1月24日、フェルゼンライトシユール）



初日パーティでのウィルソン（左）とミンコフスキ（右）